

2017/4/28

(日々雑感 92)



「なんだ、そうか！それが「文学的」ではないという理由だけで、自らしりぞけていただけだったのか！」

そのことに気づかせてくれたのは、20歳になったかならないかの漫画を描いている私立美大生で、アジア料理店で働いているアルバイトの女の子でした。

「自分で自分の籬を嵌めて（たがをはめて）いただけなんだ。だったらそれを取り外せば良いだけだ。いろんな表現方法があつて良いはずなんだよな。それを組み合わせて全体が「何か」であればいいだけなんだ。それにはじめから気づいていれば、こんなに苦しまなくて良かったのに。不自由な思いをしなくて済んだのに。ああ、いままでその縛りで、どれだけ言いたいこと、伝えたいことを押さえ、切り捨ててきたことか。あ～、ばかばかしい。止めた。もう止めた。そんな制約。」

その子はおんなの子というには体つきががっしりしていて、始めてこの店を訪れたときも、飲食店の店員にしては、愛想もなく、いささか取っつきも悪くで、こちらも多少むっつしたりもしたのですが、あるとき、この店の木製の椅子の背もたれに何で丸い穴が開いているのだろうかと疑問に思い、知っていたら教えてくれないか？と尋ねたところ

「気がつきませんでした。何ででしょう？それにしても妙なところに気がつくんですね。どんなお仕事のかたなんですか？」

と訊かれたのがきっかけで

「物を書いています。お金を貰っていないので、職業ではないけれど、仕事だとはおもっていますよ」

と言うと

「自分は、絵を描くのが好きで、今は漫画を書いています」

「美大生とか？」

「はい」

それがきっかけで、お互いに興味をもつようになったようです。しかも話し方は、意外にも極めて丁寧で落ち着いていてまともな話し方だったことも好印象だったので。

この子は、第一印象でかなり損をしているなと思いました。

何回かお店に足を運ぶうちに、いろいろ尋ねる中で、学校ではどんなことをしているの？と訊くと

「漫画の他にも、絵とか、彫刻とか、写真とかいろいろやって、それを展覧会形式で同時に陳列するプロデュースみたいなこともやっているんです。インスタレーションと言うんですが、逸れ全体で自分の何かを表現するんです。その展覧会みたいなものそのものがひとつの「作品」とでもいうんですが」

面白い考え方だと思いました。しかし、その時にはまだ、知識になっただけで、自分に関わりのある事柄だとは気づきませんでした。

しかし、その後、その子から

「通っている私立の美大を辞めました」

と言われたので、

「それは勿体なくない？折角受かったんだし、いろいろやる気にもなっているように見受けられていたのに。何でまた？」

僕はてっきり、アルバイトしているくらいだからお金の事情か、はたまた他にやりたいことでも出来たんだろうと推測して、もう少し我慢すれば良かったかもしれないよと言うと

「東京芸大を受けて、再入学するために辞めました。大好きな絵をもっと勉強したくなったんです。今のところでは、どうしても限界があって」

「東京芸大なら、実技もさることながら、学科や筆記の方も大変なんじゃないの？所謂受験勉強をしなくちゃならない羽目に陥ることになるんだから」

「はい。あまり頭は良くないので、苦勞すると思います。でも、それはしかたないとおもっています」

それを聞いて、この子はなんて「まともな」子なんだろうと感心してしまいました。はっきり「志（こころざし）」というものを持っているのが感じられました。そうしてその時、この子からある触発を受けたのです。

「何も確立された既成のジャンルに当て嵌まるように自分を抑えたり、押し込んだりする必要は全くなかったんだ。当て嵌まるものがなければ、それを創れば良いだけのことだったんだ。そうだ、それがいい。そうしよう、そうしようと言いました。（まる）で、行こう！これからは」

ぼくは、密かに、この子はいずれ将来、間違いなくその道でちゃんと生計を立てていける人間になっているだろうと思いました。ひょっとするとかなりの存在になっているかもしれないな、とも思いました。そんな雰囲気を感じたのです。

「したいことは、文学することではなくて、経験したこと、やってきたこと、発見したことを今や後代のみんなに伝え、あるいは伝え残して、その中で有用なものを選択して貰って、実際の生活の中で役立てて欲しかっただけだったんだ」

僕にはその子のように最早たっぷりとした時間が残されていないので、今更再

入学したり、有名になることに血道を上げたりすることはあまり意味もないし、時間の無駄遣いだとも思いました。それで、むしろ今自分が持っている物を更によりよく活かしていった方が得策だとも思ったのです。

「生きている間に有名になって上の方に祭り上げられる反面、衆人環視の元で、外を歩きづらく思うようになったり、取材しても本音が聞けないで妙なものを書くはめになるよりは、詠み人知らずではないけれど、静かに伝承していった方がずっと良いし、効果的でもあると思い始めてもいた。だからこの子の出現は、それに気づく良い機会だったんだ」さてもさてさて、さりとてこれからどうなるのかは、僕には一向によく分かりませんが、少なくとも予測されるその結果の不透明さに反して、これからやっていく方向や方法論はある程度固まったような気がしました。

それで、今は「小説、随想、雑文、発見記、発明記」その他に、そこで書いた物を実際に世の中で実行あるいは実現を目指してトライし、それを再びノウハウ集として書き物に著したり、実際に学校みたいな物を創って伝授伝承したり、ビジネスをつくりあげたりしたいとおもっております。

そうして逸れ全体が、みんなの役にも立つ「作品」になれば良いなとも思っております。あの子は本当に良いことを教えてくれました。

実は昨日、突然ではあったのですが、お店に行ったときに改めてお礼を言うと、本人は何のことかしら？ときょとんとした顔をしておりました。

本人が意図しないことでも、人の役にとっても立つことがあるのも、世の中の不思議といえば不思議です。いや、不思議以外の何物でもないような気がします。

だから世の中は面白いのでしょう。そうそう簡単にあの世に行くわけには参りません。